

おわりに

各事例の成果や課題から、次のような指導が授業改善の方策として有効であったことが分かる。生徒の実態に合わせて、各事例をアレンジしたり考え方を参考にしたりして御活用いただければ幸いである。

1 学び合いを生かして諸能力を向上させる

教室において集団で学ぶことの意義に、生徒同士が学び合うことがある。他者の発表や作品を見聞きしたり、話し合いによって作品を作り上げたりする中から、自己の発表や作品の改善に生かすことのできる視点を見出し、技能の向上につなげることが期待できる。また、個の読みを互いに交流させることで、新たな視点に気付いたり、読みを深めたりすることが期待できる。

事例1では、ブックトークのシナリオをグループでの話し合いを通して作ることや、発表を相互評価することを通して学び合いがあった。**事例2**では、プレゼンテーションのシナリオをグループでの話し合いを通して作ることや、発表を相互評価することを通して学び合いがあった。**事例3**では、ポスターをグループで作ることや、他者との比較をするなどして発表を自己評価する活動をして学び合った。**事例4**では、グループでの話し合いを通して『羅生門』をリライトする活動を通して学び合いがあった。

このように、ともに学び合う中から自分の力が伸びたと意識できるような指導を通して学習の成就感を味わわせ、対人関係能力やコミュニケーション能力の伸長へとつなげていくことが大切である。

2 ペーパーテストに偏らない評価の工夫の一つとしてパフォーマンス評価を取り入れる

(1) 教師の行う評価の工夫

「話す能力」や「聞く能力」を育むためには、実際にそれらの活動をさせてみる必要がある。また、言語技術としてのこれらの技能を評価するために、実技系の教科・科目で一般に行われているパフォーマンス評価を取り入れるなど、ペーパーテストに偏らない評価の工夫が大切である。

事例1ではブックトーク、**事例2**ではプレゼンテーション、**事例3**ではポスターセッションのそれぞれの活動にパフォーマンス評価（ペーパーテストでは評価しにくい種類の能力や学力を、生徒の実技、実演などで様々な観点から評価しようという評価法）を取り入れている。

(2) 学習活動として生徒に取り組みせる評価の工夫

事例では扱わなかったが、場合によっては、生徒のパフォーマンスをビデオに録画して視聴させて、学習活動としての自己評価をさせ、学習の振り返りを通して技能の向上を図るという方法もあろう。

*生徒の自己評価や相互評価は、あくまでも学習活動としてのものである。それらは形成的に評価して後の指導に生かすものであり、総括的評価として点数化し、いわゆる評定に結びつけるものではない。

3 他教科との連携を図って学習活動に情報機器を活用する

学校によっては、生徒が「教科情報」や「課題研究」等でプレゼンテーションソフトを使用した発表活動を体験しており、国語の教師よりもその扱いに慣れていることも考えられる。そのような状況を踏まえ、他教科との連携を図って学習活動に情報機器を活用することも大切である。

事例3では、発表の時間の確保が課題として挙げられたが、その改善のために、例えばポスタ

作りにプレゼンテーションソフトやワープロソフトを活用するという方法もある。そうすれば手書きよりも文字の種類や大きさに工夫を凝らしやすく、レイアウトや推敲作業もしやすい。作成した資料を1頁ごとに適当な大きさの用紙にプリントアウトすれば、手書きよりも短時間で、しかも見栄えよくでき、発表に充てる時間を確保できる。その時間を発表活動に充てることもできよう。

4 実生活や学習活動の様々な場面で活用でき、必然性を感じさせる指導を工夫する

言語活動を取り入れる際に、場面設定を生徒にとって必然性のあるものにするすることで、学習活動が、より身近で、現実味を帯びたものになり、主体的な取組を促すことができる。

事例1では、クラスメイトに対する本の紹介、**事例2**では、中学生に対する高校生活の紹介、**事例3**では、クラスメイトに対する調べ学習の発表を、それぞれ言語活動として取り入れている。いずれも生徒にとって、必然的な学習活動であり、実生活や学習活動の様々な場面で活用できるものになっている。

指導が単調にならないように、このような言語活動の工夫をすることが大切である。

5 指導のねらいを重点化した上で言語活動を取り入れ、指導に配当する授業時間を確保する

指導のねらいを重点化した上で言語活動を効果的に取り入れ、指導に配当する授業時間を確保することが大切である。

かつての国語科の指導においては、「読むこと」に比べ、「話すこと・聞くこと」「書くこと」の領域の指導が十分に行われてこなかった反省を踏まえて、学習指導要領には、指導に配当する授業時間の目安が次のように示されている。

「国語表現Ⅰ・Ⅱ」

- ・「話すこと・聞くこと及び書くことの指導は、相互の関連を図りながら効果的に行うようにし、授業時数は一方に偏らないようにする。」

「国語総合」

- ・「書くことを主とする指導には30単位時間程度」
- ・「話すこと・聞くことを主とする指導には15単位時間程度」

事例1～**事例3**の学習活動の中には「書くこと」の言語活動があるが、それは、「話す能力・聞く能力」を重点的に育成するというねらいを達成するための学習活動として取り入れたものである。したがって、年間の指導計画にも「話すこと・聞くこと」の単元として位置付ける。

一方、**事例4**では、「読む能力」を重点的に育成するというねらいを達成するために、「話すこと・聞くこと」の学習活動を取り入れたものである。したがって、年間の指導計画には「読むこと」の単元として位置付けることになる。

6 人物描写や情景描写等を深く読み取らせることの新たな意義

ケータイ小説が女子中高生の間で人気を集めている。ケータイ小説は、文章が拙くストーリーも型にはまりがちなことなどから、学校図書館の関係者の間でも、子どもたちの読書の入り口になることを懸念する声がある。しかしながら、出版界もその動向を無視できなくなりつつあるようだ。毎日新聞の「第53回学校読書調査」によると、女子中高生の「人気の本ベスト5」のほとんどがケータイ小説であった。

今後は、国語の授業が、新鮮な感動と驚きをもって名作に出会う貴重な機会になるという高校生が増えるかもしれない。小説を深く読み取らせたり読み味わせたりすることに、新たな意義や必要性が生じつつあるようだ。

高等学校における教科指導の充実
国 語 科
「話すこと・聞くこと」の指導の工夫

発 行 平成20年3月
栃木県総合教育センター 研究調査部
〒320-0002 栃木県宇都宮市瓦谷町1070
TEL 028-665-7204 FAX 028-665-7303
URL <http://www.tochigi-edu.ed.jp/center/>